

歴史まちづくり戦略
策定に寄せて

なごやの未来像

山田 雅雄

2010 年開府 400 年は、名古屋新世紀計画 2010 の最終年度であるとともに、人口減少への変移、団塊世代の退職、広範な環境問題への市民意識の高揚、グローバル化による不安定な社会経済状況、政治的環境の変化、災害の頻発化など時代は大きな変換点を迎え、なごやの将来像を描くべき絶好の年度であった。

図 1 は中期戦略ビジョンや開府 500 年のまちの姿懇談会の提言を含め、都市空間に関わる環境の 3 戦略、住生活基本計画、歴史まちづくり戦略および都市計画マスタープランを計画目標年次に従って、整理したものである。

なごやのアイデンティティはものづくりの文化、家康の城下町づくりに始まる優れたまちづくり、豊富な近世武家文化の 3 つであると思う。これらを活かし大都市なごやの多面性を描き出そうとする個別分野での計画策定とその総合化はまるでピカソの肖像画のようである。ピカソは対象の人物像を多面的にキャンバスという平面に天才的に描いているが、なごやの未来像を描くのは容易ではない。図 2 はピカソの絵画というわけにはいかないので、これらの計画を総合化するための組立図である。

アイデンティティを活かした、「全く新しい」あるいは「新しい古い」まちづくりにより、歴史を形作りながら、環境・暮らし・拠点性・次世代という要素により各計画の関連・構造を整理してみた。名古屋市の歴史的な遺産は戦災で殆ど焼失しているが、歴史・風土・地形をふまえ今後 100 年の歴史を創るというのが基本的な考えである。

「全く新しい」というのはパリのエッフェル塔のように新しい材料を使うなど今までにない優れた意匠の建築物すなわち前衛的なものを作る、また「新しい古い」とは古い町並みにあわせて古い意匠の新しい建築物により建設時から歴史的な空間を形成するというもので、ともに 100 年は通用する都市空間をめざしていく。

以上が歴史まちづくり戦略を策定した狙いである。

この歴史まちづくり戦略は分かり易い内容でまるで「テキスト」のようだとの評判である。若い人々に今後のまちづくりに参加してもらおう際のテキストとなることを祈念しつつ、策定に関わっていただいた委員の方々と職員のご尽力に感謝を申し上げる。

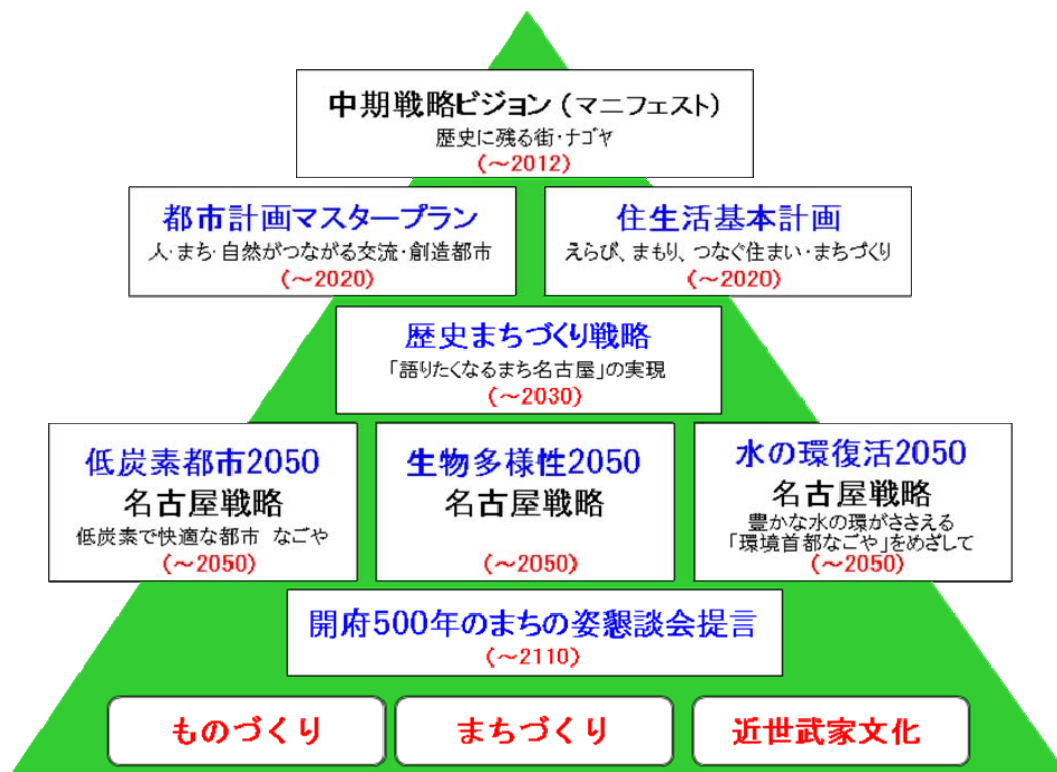


図1 未来の名古屋を多面的に語る

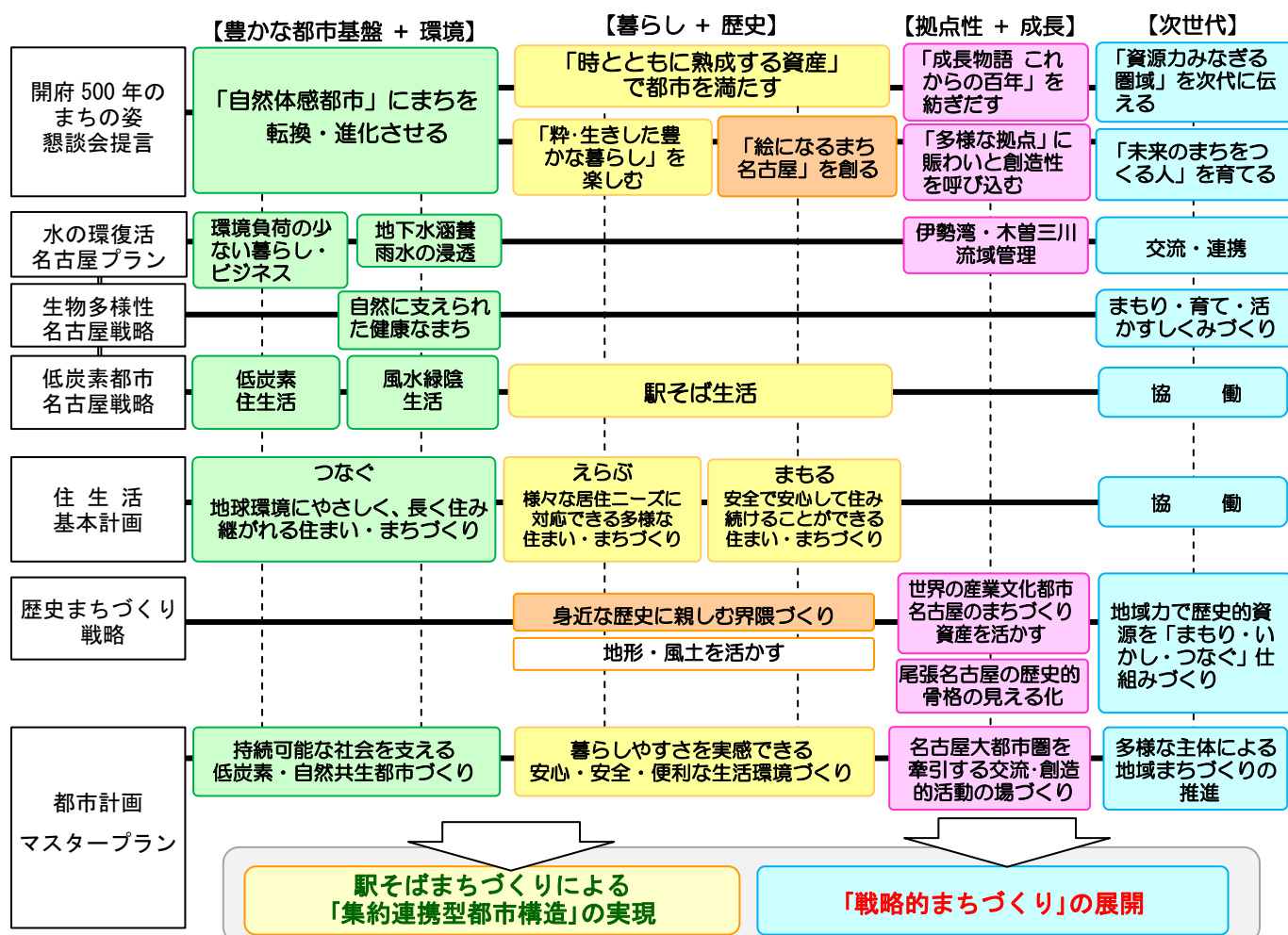


図2 計画組立図

名古屋の歴史まちづくりに思う

瀬口 哲夫

日本の中央部に位置する名古屋は、その生い立ちから常に国の動きと連動しており、名古屋を知ることとは、日本を知ることでもあるといって過言ではない。特に、近世から近代にかけて、名古屋の都市としての発展は特筆に値する。名古屋城に象徴されるように、徳川御三家筆頭・尾張徳川氏の存在が、市民に大きな力と誇りをもたらし、名古屋独特の文化が生まれた。明治以降は、日本の三大都市としての一大発展を遂げた。その結果、国内有数の都市空間を形成するに至った。

都市の歴史は、そこに住んだ人々の生きざまでもある。彼らの生活を知り、改めて歴史を見つめ直すことは、これまでも多くの人によって行われてきたことである。今、名古屋開府 400 年の機会に、「名古屋市歴史まちづくり戦略」と称して、名古屋を再度見つめ直そうとするのは、身近な歴史を見つめ直すことによって、地域の愛着を深め、人々の絆を強め、魅力あるまちづくりへとつなげていってほしいという思いからである。

「名古屋市歴史まちづくり戦略」は、大都市・名古屋において、歴史を大切にしまちづくりを行うという宣言である。これまで、日本において、まちづくりというと新しいものをつくることが優先されてきた。その中で、歴史的なものが失われることも少なくなかった。しかし、この名古屋では、歴史的なものを磨きあげ、歴史的なものに敬意を払いながらまちづくりを行いたい。これにより、古さと新しさが息づくまちづくりができることが期待される。日本の大都市において、画期的なことである。行政と市民の協働による着実な成果を期待したい。

古代の運河　－山崎川をたどる－

赤羽　一郎

平和公園西端の猫が洞池を水源とする山崎川は、千種区、昭和区、瑞穂区を貫流し南区の東築地町付近で名古屋港に注いでいる。古墳時代の海岸線は、国道1号線（千竜通）辺りと推定されており、現在の南区、港区には遠浅の海が広がっていた。この海が愛知という地名のルーツである“あゆち潟”である。山崎川は、このあゆち潟に流れ込んでいた河川のひとつである。

総延長 12.5km の山崎川の流域には多くの遺跡があるが、その代表例を挙げておこう。

・H-101 号窯(東山植物園内)

平安時代末期の窯跡。山茶碗、壺、瓦などを焼成。覆屋内に保存されており、見学ができる。

・末森城跡(千種区城山町、城山八幡宮一帯)

織田信長の父、信秀が築いた戦国時代の平山城。後に、信長によって攻め滅ぼされる。

・大曲輪貝塚(瑞穂公園内、国史跡)

縄文時代晩期の貝塚。陸上競技場の北出口近くで出土人骨のレプリカ(ケース内)を見学できる。

・曾池・呼続遺跡(呼続公園付近)

縄文時代から古代にかけての遺跡群。木製品や須恵器が数多く発見されている。

ところで、愛知県は、今日もやきものづくりが活発に行われているが、その源流は千種区・昭和区にまたがる丘陵地帯（考古学的には、猿投窯東山地区と呼んでいる）で展開された須恵器生産に求められる。わが国の須恵器生産は、古墳時代中頃に朝鮮半島の技術が大阪平野に進出した大和王朝によって導入されたことに始まる。その中心地は、陶邑窯（すえむら：大阪府堺市）であり、この須恵器生産技術が波状に全国に伝わったと考えられてきた。しかし、近年の名古屋市内の集落遺跡や窯跡の発掘調査によって、陶邑窯と操業年代に隔たりがあまりなく、また陶邑窯とは異なった技術で造られた須恵器が知られるようになってきている。このことから、猿投窯東山地区での須恵器生産が、必ずしも陶邑窯から伝えられた技術ばかりでなく、独自に朝鮮半島から導入された技術によっても行われていた可能性が指摘されつつある。この猿投窯東山地区での須恵器生産に関わった勢力は、「尾張氏」であったと考えるのが自然であろう。

“あゆち潟”に本拠をおいていた尾張氏は、農業のみならず伊勢湾の海産物や海上交通を掌握して、古代の大豪族に成長していった。この尾張氏が良質の粘土が埋蔵されている名古屋東部の丘陵地帯に須恵器生産を根付かせたのであろう。上記の末森城跡の「末」は「陶」から転訛した文字であり、古代の須恵器生産の記憶を今日に伝えている地名ではなかろうか。また、曾池・呼続遺跡からも古墳時代中期に生産年代がさかのぼる須恵器が出土している。このように見てくると、古代の須恵器生産コンビナートと尾張氏の本拠である“あゆち潟”を結び付け、運河としての役割を担っていたのが山崎川に他ならない。

今日の山崎川は、都市空間を流れる河川の宿命として三面コンクリートの排水路の感もある。しかし、近年の調査では、外来種や移入種とのせめぎ合いの中で、在来魚・亀が確認されている。また「さくら名所百選」として、春には人びとの目を楽しませている。そんな山崎川が生き生きと活躍していた歴史にも、ぜひ想いをはせてほしいものである。

名古屋の産業遺産 ―産業都市発展の記憶―

石田 正治

愛知県の国内総生産（GDP）は2009年度には37兆円を超え、これは世界の約1パーセントにあたる。また愛知県の製造品出荷額（工業生産額）は34兆4313億円で、33年連続全国一である。GDP1パーセントといえば、スウェーデンやオーストリアなど先進工業国の一国のGDPに匹敵する。データによるまでもなく愛知県を中心とする東海地域は世界でも屈指の工業地帯であり、その中心が名古屋である。

現在、私たちは、生きるための衣食住に不自由することはほとんどないと言ってよいだろう。戦後の荒廃の中での物資に困窮した時代を振り返れば、隔世の感がある。それどころか溢れるものに囲まれて大変豊かな文化的生活を享受している。今日のこの豊かな生活を根底で支えているのは、いうまでもなく産業技術と労働である。多くの先人の苦勞と努力によって現代の産業社会が築き上げられてきた。その歴史を具体的に語るものが産業遺産であり、産業都市名古屋の輝かしい発展の記憶でもある。

ところで産業遺産というと、何か特別なもの、身近には簡単に見られないものと思われていないだろうか。産業遺産とは、一口に言えば、産業の形成と発展に重要な役割を果たしてきた、古い道具や機械、工場施設、土木構造物、建築物、図面、写真などのうち、今日に残されているものを指し、人間の多面的な活動の歴史を構成する史料である。したがって産業遺産には、様々な顔があり、一様な姿形をして存在していない。工場内部にある生産機械のように容易に近づけないものもあるが、注意深く眺めてみれば私たちの暮らしの行動半径の中に意外に多く産業遺産はある。中には立派に現役で使われていて、言われてみなければ歴史的価値ある遺産と気づかないものもある。以下に名古屋の主な産業遺産を訪ねてみよう。

名古屋の中心を流れる堀川、名前の示すとおり人工の川でこれも見方を変えれば産業遺産だ。1610年、名古屋城築城の際に福島正則が資材運搬用の運河として開削したと伝えられる。堀川は、その後も鉄道や道路輸送が普及するまで重要な交通手段であった。とりわけ明治以降の堀川は、舟運が栄え、名古屋の大動脈であった。堀川に架かる納屋橋や岩井橋のような土木技術の粋が見られる名橋も産業遺産であり土木遺産だ。堀川に接続する庄内用水は、運河としての機能も兼ねていた。その証は1910年に造られた庄内用水元枳樋門に見られる。

明治以降の名古屋の産業化は、さらに新堀川、中川運河の開削、松重閘門の建設へと続く。これらは運河としての利用はほとんどなくなってしまったが、歴史ある水辺の空間として再活用が期待される産業遺産だ。

名古屋港へでかけてみよう。名古屋港は、産業都市名古屋の海の玄関口、2009年度の総貨物取扱量は1億6500万トンで日本一の貿易港だ。産業都市名古屋の物流の基地となっている。名古屋港の開港は1907年で、防波堤などの初期の諸施設は人造石（たたき）で造られた。今では人造石はコンクリートで大部分が覆われているため、一部でしかその姿を見ることができないが、これらも産業遺産と言えるだろう。名古屋港には、跳上橋や穀物サイロ、10号地の灯台、8号地閘門、大江政府倉庫などの産業遺産があり、近代港の歴史を物語っている。また、金城ふ頭に建設されたJR東海の「リニア・鉄道館」は、蒸気機関車から新幹線にいたるまでの日本の鉄道技術の歴史を実物で展示する博物館だ。名古屋港の発展は、鉄道輸送とも密接に関連しているので、鉄道の博物館はこの地にふさわしい。

名古屋は、近代の上水道、下水道ともに全国的にも先進の都市である。鍋屋上野浄水場は、名古屋で最初に造られた浄水場で、1910年に着工、1914年に完成し同年9月から給水を開始している。その後、市の発展にともない拡張工事がなされ、施設の増強、改善が行われて、今日の給水能力は一日あたり290,000立方メートル、名古屋市民の命を支えている。赤煉瓦の旧第一ポンプ所は創設時の建物で、内部には1992年まで使われた荏原製作所製のポンプ（1926年製）が残されている。1914年に造られた東山給水塔は鍋屋上野浄水場のポンプ室からの送水を受けて、塔上のタンクに貯水し、自然流下で配水した。現在は、災害時の非常用として水を蓄えている。演劇練習場となっているアクテノン、稲葉地配水塔であった。内部に配水タンクや仕切り弁などが残されている。

下水道においては、1930年、日本で最初の散気式活性汚泥法による下水処理が熱田処理場、堀留処理場で行われている。

ミュージアムに産業遺産を訪ねてみよう。名古屋市西区にあるトヨタグループの「産業技術記念館」、ノリタケカンパニーリミテドの「ノリタケの森」はともに産業遺産の博物館だ。

産業技術記念館は、大正期に建設された旧豊田自働織布工場の織布工場や原綿倉庫などの煉瓦造建造物を活かした博物館で、建物そのものが産業遺産である。館内では、紡織技術の歴史を歴史的な自動織機や紡績機械で展示する繊維機械館、トヨタ自動車の創業期の自動車製造技術を展示する自動車館、旧豊田紡織本社事務所、豊田商会事務所などが保存、公開されていて、ここは産業遺産の宝庫だ。

ノリタケの森は、ノリタケカンパニーリミテドの前身、日本陶器合名会社の本社工場（1907）の跡地で、ここで近代的な輸出用の洋食器が製造された。その広大な敷地の中に製土工場や六本煙突の基礎部遺構などの産業遺産がある。

名古屋市中区、伏見にある「でんきの科学館」は、中部圏では最初の電気事業会社、名古屋電燈株式会社本社の跡地である。名古屋電燈の創立は1889年、東京、神戸、大阪、京都に次ぐ全国で5番目の電気事業事始めであった。関連の資料がでんきの科学館には保存展示されている。

1954年に建設された名古屋テレビ塔は、わが国最初の電波塔である。2011年7月、アナログテレビ放送の停止とともに電波塔としての使命を終える。今後は、名古屋のランドマークとして残されると思われるが、本来の役割を失ったものの維持管理には多額の費用がともなう。こうした産業遺産をはじめとして歴史的価値あるものを大切にするという文化が名古屋にあることを期待したい。

身近な歴史的建造物の魅力

西澤 泰彦

2002 年、瑞穂区役所のまちづくり推進部の方から、「瑞穂区の魅力調べてほしい」と言われた。名古屋の方の会話を聞いていると、「どこにお住まいですか」と問われて、「瑞穂区です」と答えると、「いいところですね」という答えが返ってくる。ところが、なぜ、瑞穂がいいところなのか、きちんと答えてくれる人は少ない。そこで、当時、私の研究室で卒論を書いていた近藤以久恵さんと一緒に、瑞穂区をあちこち歩きながら、「いいところ」の理由を考えてみた。閑静な住宅地、緑が多い、というのは、一般論として誰もが認めるが、そのような理由であれば、同じところはあちこちにあり、瑞穂区の魅力語ることににはならない。そこで私たちは、瑞穂区のあちこちにある 1920 年代から 1950 年代に建てられた住宅をつぶさに見ながら、そこで展開された設計者、施工者、あるいは住まい手の工夫を読み取り、評価することとした。

その一点目は、庭付戸建住宅と同じ規模の長屋があることだった。長屋と言え、ば、「裏長屋」という言葉を連想するように、狭い住宅だと思いつ込んでいたが、瑞穂区のあちこちに、前庭や応接間、あるいは、離れを持った長屋があることがわかった。そこでは、庭付戸建住宅と同じ居住環境が用意されていた。このような長屋が成立した背景には、瑞穂区での宅地開発の中心であった耕地整理や区画整理でつくられた宅地の奥行きが長く、敷地に余裕があったためである。

二点目は、そのような長屋が戸建住宅と混在していることである。「裏長屋」とは、長屋が街の裏通り（路地）に面していることを示した言葉だが、瑞穂区の長屋は、路地に面したものもあれば、歩道のある幹線街路に面したものもある。そして、建築形態が明らかに異なる戸建住宅と長屋が混在していることで、街並みに変化があり、その変化が魅力になっていることである。

三点目は、このような戸建住宅や長屋の工夫である。瑞穂区を歩くとよく分かるが、一見、平坦に見える街区の多くは、実は平坦ではなく、高低差が思いのほか多い。したがって、宅地開発の中で、多くの住宅が盛土をして、住宅を建てている。盛土をするので、道路から敷地に入るには、階段が必要になり、そのため、住宅の玄関は、道路と敷地の境界線から後ろに退くことになり、その余地を使って前庭がつくられる。これは、長屋でも盛土された敷地を使えば同じことになる。盛土をしなくとも、玄関脇に応接間を洋館として造れば、その分が玄関より道路側に張り出すため、結局、前庭ができる。こうしてできた前庭には、洋館の脇にはシュロが植えられ、戸建住宅の母屋の前には松や桜が植えられる。このような樹木の集積が、瑞穂区に緑が多いように感じられる主因である。

結局、一見平凡に見える戸建住宅や長屋であっても、そこには、建設に関わった人々の工夫があり、その工夫を見出せば、そこに大きな魅力を認めることができる。

私が初めて瑞穂区の街を歩いたのは、1982 年のことだった。名古屋大学からアルバイト先の瑞穂区佐渡町まで、1 時間かけて歩いた。それから 20 年後、瑞穂区の魅力を探るようになるとは、夢にも思わなかったが、街歩きの最初の頃は、当時の体験が役立った。

歴史まちづくりの基本は、身の回りにある建物と街を愛すること。そのためには、街の魅力や建物の魅力を味わうことが必要で、その第一歩は、街を歩き、建物を見ることだ。みなさん、街を歩きましょう。笑顔で、あいさつしながら。

歴史に謙虚に、成熟した街へ

～「自分さえよければいい」から「みんながいい」「思いやり＝エシカル」な、まちづくりへ～

原田 さとみ

「壊して新しいものを作る」より、「古いものに手を入れて活かす」方が、おしゃれで楽しくかついいと、未来は言っているように思います。「懐かしい未来」の到来ですから。

古くなった建物は、新しい風を入れて、愛をそそいで使い続けると、建物も住人も地球も、過去も未来も喜んで「三方よし」以上になるのではないのでしょうか。これは、気持ちいいし、奥深いっ！・・・スマート・ライフ、賢い生き方だと思います。歴史に人が関わり、手をかけて使ってこそ現代に生きてくる。建物は、人のぬくもり、暮らし、人生があってこそ蘇り、受け継がれてゆくのではないのでしょうか。

古い街並みに魅力を感じ、お洋服のセレクトショップを始める時に私が選んだ場所は、栄ミナミの長屋通り。時代からひっそりと忘れ去られたような大正時代からのレトロな路地裏。栄地区の商業エリアでありながら昔ながらの暮らしが息づく庶民的な小路でした。当時は旅館の物置に使われていた8坪ほどのスペースをリノベーションして、大正時代の梁をそのまま活かしながらもモダンに変身。そのスタイルは若者たちに喜ばれ、癒される空間として慕われました。「和むね。温かいね。居心地いいね。大事にするっていいね」って皆さん、古い建物の放つエネルギーに魅了され、そこに身を置くことを楽しんでくれているようでした。新しい人々は、古いものが好き。そこにややこしい理由なんてなくていい。感覚的に心地いい、好き、と感じるところが入り口で、後から歴史的興味がついてきて、それが保存の心へと繋がります。そのためにもそんな仕掛けが街の中にいくつもあれば最高です。

できるだけ今あるものを壊さないで使う、直す、手をかける、大事にする、愛着を持つ。これは、建築やまちづくりだけでなく、すべてにおいてあてはまること。子ども達のおもちゃや身の回りのものにもそんな思いを寄せてほしい。モノがあふれる現代では、モノに対してありがたみが薄れています。良質なモノを見極める目も養われなくなりつつあります。ちまたにあふれる安価なものを買って、安物なのですぐに壊れて、飽きたら捨てて、買い換える。こんな使い捨ての悪循環の中では、モノを大事にする心は育たない。まちづくりでも、一度作られた建物は無駄にしないでその建物に宿る物語とともに愛着を持って、手をかけて工夫して大事にしている大人の姿を子ども達が見ることは、何よりもの教育かだと思います。「もったいない」「直して使う」これは私たち日本人の誰もが持っている“思いやり”の心ではないのでしょうか？

私の提案するキーワードは“エシカル”です。直訳すると「倫理的な」という意味ですが、一言で“思いやり”。私たちの幸せの裏側で、弱者への搾取や地球環境破壊などで、誰かが犠牲になっているとしたら、本当の幸せではありませんね。物事の背景に思いを巡らして、社会や環境に優しいか、関わる人みんなが喜んでいいのかを考えて行動するのがエシカルです。私のエシカル^{*1}は、ファッションから始まっていますが、建築やまちづくりなど様々な分野にあてはまる概念です。歴史的な建物や街並みを保存し活用する取り組みは、まさにエシカルなまちづくり。地域の資源を守り、環境への負担を軽減し、周りの誰をも何をも犠牲にしない、人にも地球にも優しい方法で、裏側にも気を配った“思いやりのある街づくり”ってみんながハッピーですよ。

お隣さんは元気かな？ ご近所さんはどうしているかな？ 小さなところから始まる“思いやり”が、まちづくりの原点なのかなって思います。自分の住んでいるお隣近所にも、さまざまな歴史があり、古くて良いことや大事なことがいっぱいあります。私たちは、長い歴史の中の一瞬をここで過ごさせていただき、歴史のひとコマとなるのです。どの時代も大事なパート。今を生きる私たちは、今残っている建物・街に責任を持って、後世へ幸せな街のバトンを渡すために、私たち自身も“まもり・いかし・つなぐ”美しい歴史の一部になりたいものです。

＊１ エシカル・ファッションとは、エコロジカルで安全なオーガニック素材やリサイクル素材を使い、正しい労働環境で公正な賃金のフェアトレードであり、地域の伝統的技術や製法を活かしながら、クリエイトされるファッションのことを言います。

名古屋のまちの発展と水との関わり

松尾 直規

名古屋に限らず、水とまちの歴史は切り離すことができない。古今東西、水の有る所にまちが生まれ、栄え、文明が発展してきた。清洲越を経て名古屋の城下町が発展したのも、堀川を使った海からの物資の輸送と人の往来、ならびに木曽川からの水路を使った木材の搬入に支えられたものであった。また、明治以降、名古屋が近代都市として発展したのも、都心と名古屋港を結び、物流幹線として名古屋の産業・経済を支えた中川運河に拠るところが極めて大きかった。都市用水については、庄内川からの御用水に始まり、大正時代の木曽川自流水利権の確保など、質のよい豊富な河川水を十分に調達した上で、近代的な上水道、下水道の整備が先進的に進められ、市民の生活と産業を支えてきた。もちろん、これらの背景には、木曽の山に通じ、海に面した強固な熱田台地の西端に城下町を築くという、地勢を熟知し先見性に富んだまちづくり戦略があったことは言うまでもない。地の利、水の利を知り、それを生かして名古屋のまちづくりを成し遂げた先人たちの知恵に驚嘆するばかりである。

これからの名古屋のまちづくりにおいても、歴史遺産として認知された堀川、中川運河のみならず、身近な河川、水路、ため池などの歴史を掘り起こし、そこに潜む先人たちの知恵と戦略に学ばなければならない。そうした歴史には、人と水との密接な関わりが必ずあり、それに基づくまちと文化の発展の過程が見出されるはずである。水と人、及びまちの発展との関わりから得られた歴史的知見を、安全・安心で心豊かに暮らすことができるまちづくりに生かす戦略こそ、歴史まちづくり戦略の根幹であろう。

建築資産の保存・活用に取り組んで

水谷 友彦

まちづくり活動に携わっていると、古い町並みや伝統的な建物の保存のことだけでなく、社会の様々な仕組みや人々の関わりが見えてきます。また、そこに参加する人も、一般市民・行政・専門家と立場も違い、関わる動機やきっかけも異なっていて、その人々との交流を通して視野が広がっている気がします。

私がまちづくり活動に関わるようになったのは、愛知建築士会の委員会活動で、1995年に名古屋市内「白壁・覚王山・中村大門・八事」4地区のタウンウォッチングに参加してからです。これらの地区には明治～昭和初期のすぐれた近代建築が数多く残っており、それらが存続の危機に瀕していることを知りました。そして新たな委員会活動として「建築資産をまちづくりに活かす」をテーマに、近代建築の保存と活用に取り組みました。主な事業は、1996年 揚輝荘・聴松閣の地下ホールで「セッション'96 in 揚輝荘」、1997年 白壁地区で「建築資産をまちづくりに活かす」見学会・講演会・シンポジウム・展示会・狂言公演、揚輝荘で大学公開講座(9校参加)など、1998年 名古屋文化コンテストに参加し揚輝荘でデザインゲーム、2000年「リファイン建築」、2005年 明治村・呉服座で「国際建築トリエンナーレ 2005 in 明治村」～伝える日本の建築文化～など、優れた近代建築の活用を通してその価値を多くの人に知っていただき、その保存と活用を訴えてきました。これらの活動の成果は、1998年 白壁地区が「文化のみち」として位置づけられて整備され、また現在名古屋市の所有となった「文化のみち榎木館」「文化のみち二葉館」「揚輝荘」などの保存につながりました。

この15年の活動で大きな成果があったのは、行政の力と熱意そして市民の協力によるものですが、バブル崩壊後の価値観の変化、時代のニーズでもあったと思います。歴史的建造物以上に日本経済が危機的状況の今、私たちの取り組みも新たな方策を考えなくてはならないと感じています。より多くの人に参加していただき、その保存と活用への理解と協力を得るとともに、行政との連携も更に深めていくつもりです。

まちづくり活動は参加する人はもとより、企画する私たちも楽しめるものでなくてはなりません。先日(平成23年3月5日)開催した、西区四間道・円頓寺での見学会・講演会・シンポジウム「町家再生の技と智慧」～歴史的建造物の保存・活用に向けて～も参加者に好評を得て、有意義な次につながる事業になったと思います。

最後に、建築資産の保存・活用に向けて、1997年の事業での提言をまとめた「白壁宣言」(要約)を記しておきます。

- ・歴史的な建築資産を保存・活用するための人々の意識の改革
- ・技術的な努力により、古い建物を保存・活用しながら新しい機能をもった建築物とする。
- ・市民、企業、行政が力をあわせて建築資産保全に取り組む。
- ・建築資産保存の活動の輪を広げていく。
- ・建築資産の保存・活用のための財団や基金の設立を目指す。

都市計画、エリア・マネジメントの基盤としての歴史まちづくり

村山 顕人

名古屋市歴史まちづくり戦略は、尾張名古屋、世界の産業文化都市・名古屋、そして、身近な界隈の歴史的資源の再生・活用に焦点を当てたまちづくり戦略である。これは、本来の都市計画で展開すべき都市空間形成の基本的戦略であり、今回、その戦略が明快に提示されたことは、名古屋市の歴史資産の保全・活用を超えて、都市計画にとっても大きな意義があると言える。

最近、名古屋市では、この歴史まちづくり戦略の他に、2050年に向けた低炭素都市・生物多様性・水の環復活の各戦略、都市計画マスタープラン、住生活基本計画、交通戦略など、我々が生活する都市空間・都市環境の形成に関わるマスタープラン（長期的・概略的・統括的な計画）の策定がほぼ同時に進められている。しかし、残念なことに、これらの計画間の調整は必ずしも十分になされておらず、名古屋市内の都市空間・都市環境の将来像はまだはっきりしない状況である。

名古屋市全体の将来像を一度に検討することは容易でないため、今後は、地区毎に、都市空間・都市環境の将来像を構想し、その実現に向け、歴史的資産の保全・活用のみならず、老朽化・陳腐化した建造物の建て替えや改修、安全・快適な歩行者・自転車空間の整備、公園やオープン・スペースの整備、美しい街並みの誘導、各種生活支援施設の整備、環境への配慮、安全で清潔な公共空間の維持といったハード及びソフトの多岐に渡る施策を効果的かつ個性的に展開することが求められる。

ここで重要なのは、こうした取り組みには、その作り手・使い手である市民、企業、行政、非営利活動団体、大学等の多様な主体が関与することである。この歴史まちづくり戦略の策定を契機として、現存する歴史的資産の再生・活用を基盤に、市内の様々なエリアで、多様な主体による都市空間・都市環境の持続的なマネジメントが展開されることを期待している。



歴史まちづくりと観光

森田 優己

観光振興は、歴史的資源の保存・維持のための財源を調達する重要な手段の一つである。国際産業遺産保存委員会（TICCIH）も産業遺産の保存戦略として、観光振興を挙げているほどである。しかし、世界遺産指定地域にみられるような過度の観光客の流入が、歴史的資源の枯渇や破壊を引き起こしている例もある。その結果、歴史的資源の文化的価値を重んじれば重んじるほど、当該地域における観光振興には強い警戒感が生じることとなる。まさに、経済と文化の対立である。

しかし、経済と文化は本当に対立するのであろうか。観光振興に対する警戒感を生み出しているのは、観光に対するイメージの貧困さではないだろうか。近年やっと、観光とは異文化交流であると言われるようになってきたが、依然としてそのイメージは、「物見遊山」、「旅の恥はかき捨て」などの言葉から想定されるようなものである。このようなイメージを作りだした責任の一端は旅行業界にあると思うが、業界自体は従来の観光幹旋業から（観光）まちづくり支援などの交流産業へと業態転換しつつある。このような動きは、観光の社会的・経済的役割についての期待度の大きさを反映したものと言えよう。

では、観光とは何か。観光とは、ゲスト社会とホスト社会との間における異文化交流の「体験システム」の総体である。そして、この「体験システム」は、質の異なる4つのシステムから成り立っている。それらは、「点」としての宿泊、「点」としての飲食、「面」としての場所（観光施設を含むホスト社会全体）、そしてこれらを結ぶ「線」としての交通である。この中で最も重要かつ異文化交流の質を決定するのは、「面」としての場所に他ならない。ゲスト社会である他地域・他国の文化を広く理解した上で、ホスト社会のもつ「宝物」＝文化を披露するのは、「面」としての場所だからである。その他の3つのシステムは、「面」＝場所へ観光客を誘う、または、観光客が滞在するための必要不可欠なツールである。（場合によっては、ツールそのものが観光資源となることもある。）

その「宝物」とは、人々の暮らしや産業の記憶を含めた歴史的に形づくられてきた文化的遺産である。それに加えて、いや、何よりも大切な「宝物」は、そこに生きる人々（一観光にかかわる事業者、行政や住民など）が協働して歴史的資源を保存している姿であるはずだ。これこそが、異文化交流にとっての観光資源なのである。

それゆえ、ホスト社会がしっかりとした合意形成にもとづく資源管理方針と観光客受け入れ方針を確立できていれば、ホスト社会自らが異文化交流の「体験システム」をデザインすることが可能となる。そうすれば、観光振興は、歴史的資源の保存・維持のための財源を調達する重要な手段の一つとしての役割を果たしうることとなろう。こうして、経済と文化は融合する。

「名古屋市歴史まちづくり戦略」が、その大きな第一歩となることを期待している。

なごや言葉と名古屋文化

安田 文吉

最近なごや言葉（私自身は名古屋弁という言い方が好きだが）に関わる出版が続いた。一つは、名古屋市文化振興室刊の「名古屋ことば^{ことば}始め 一名古屋ことばの魅力発見一」、もう一つは東海テレビ製作の「名古屋^{ことば}かるた 読み手CD付き」。いずれも監修は私。「名古屋ことば^{ことば}始め」の裏表紙にも「名古屋ことばは優しく、丁寧、大らかで、温かみのあるきれいなことば。尾張名古屋の土地柄をよく表してござるなも」と書いたが、方言はその土地の、土地柄やその土地柄に裏付けられた地域文化をはかる格好の指標。名古屋弁の構成の特徴は上町言葉（^{うわまち}上の言葉）、^{かみ}下の言葉と武家言葉。上町は基本的には広小路通りより北側の碁盤割りの街。下は南側の大須から橘町に至る街。熱田は位置的には下だが、熱田の人は名古屋と熱田は別と意識し、同じ名古屋弁だが、特に熱田弁（宮弁…熱田神宮に因んで）なる独特の言葉もある。

言葉の特徴としては、

- ①名古屋弁には「さま(ちゃま)」がつく …おじさま おばさま にいさま ねえさま おっさま(和尚様) 文ちゃま
- ②名古屋弁には古語が生きている …お(措)いてちょうだやあ 米をか(浸・漸)してちょうだやあ
- ③名古屋弁には京言葉が入っている …ようけ(余慶) ぎょうさん(仰山)
- ④あそばせ言葉 …ごまやあすばせ いらやあすばせ
- ⑤武家言葉 …ご無礼します ○○でござりまする

これらの内、②が特に重要で、名古屋弁には、江戸時代の共通語が全国で一番多く残っていること。つまり江戸時代より、何事につけても変わらぬ土地柄。変わらぬということは変えなくても良いということ。それは、木曽の山（木曽檜）、木曽三川（木曽川・長良川・揖斐川）、伊勢湾、濃尾平野という山川海野の幸に恵まれた豊かな生産性の高い土地柄だから。この豊かさに裏付けられて、様々な文化が育ってきた。曰く、芸能（習い事）、物作り、食などなど。中でも芸能は、殿様はじめ、家来、町人、庶民に至るまで底辺が広く層の厚い有り様だった。

例えばお茶。尾張名古屋は日本一の抹茶文化で知られるが、尾張藩に客が来ると、まず抹茶を出し、用が済むと、能でもてなしていた。徳川美術館の展示は、茶室、藩主の間、能舞台と続いて、この順を示している。それが庶民にまで広がって、「ごまやあすばせ」「よういらやあしたなも。まあ（抹茶を）一服どうだやあも」というように、尾張名古屋ではどこでも、来客があると抹茶を出すのが今も習慣になっている。弘化三年（一八四六）の『碁茶乱談』序に「…尾張はまるで碁茶乱となる」とあるように、幕末の名古屋では、碁、抹茶、乱舞（能）が町人によって盛んに行われており、まさに底辺が広がっていったことが確認される。

この他、茶道・華道・香道以外にも、名古屋が中心の平曲、熱田発祥の都々逸、さらに名古屋甚句、常磐津や西川流の踊りなど、芸能活動の盛んなこと、他所には優るとも劣らなかつた。いまでも、バレエや、フィギュアスケート、市民オーケストラ、こども歌舞伎、果てはど真ん中祭りに至るまで、実に様々な芸能が盛んに行われて、まさに芸処そのもの。この名古屋の底力は、豊かな土地柄に因るのは当然だが、もう一つ、何事につけても「まあええがやあ」という大らかさも大きな要因だ。